

第 72 回日本木材学会大会（名古屋・岐阜大会）を終えて  
～新型コロナ感染状況（第 4、5、6 波）との葛藤の日々～

**【第 72 回日本木材学会大会（名古屋・岐阜大会）を終えて】**

（大会運営委員長 名古屋大学 福島和彦）

第 72 回日本木材学会大会を無事終えることができたことは、運営に携わる関係者、参加者のご協力の賜物と心より感謝しております。

思えば、繰り返し押し寄せる新型コロナ感染拡大の波に翻弄され、決断を迫られる日々の連続でした。東京大会から受け継いだ昨年 3 月下旬の時点では、70 回、71 回と対面式の発表が行えなかったことを受けてのスタートでした。その時点では、第 3 波も収束しており、72 回大会は対面式を基本として実施しようということで、名古屋大学の全学共通教育スペースの大教室（ソーシャルディスタンスを保つため）を必要数確保しました。

しかし、4 月に入り、第 4 波が始まり 4 月 25 日から 6 月 20 日まで第 3 回目の緊急事態宣言が発令されました。こうした状況を鑑み、6 月の理事会では、口頭発表、ポスター発表をオンラインで実施することを迷うことなく提案しました。

東京オリンピック後に拡大した第 5 波は 8 月下旬にピークに達しましたが、その後急速に収束し、10 月の時点では新規感染者数も激減し、大会の開かれる 3 月は対面式でもできるのではないかと思うことさえありました。しかし、既に業者に詳細な業務内容を発注し、契約も済んでいたため、事実上変更することはできませんでした。ただ、大会 3 日目（3 月 17 日）の授賞式やクロージングセレモニー、公開シンポジウムは対面を基本としたハイブリッド方式で実施できることに疑う余地はありませんでした。

ところが、事態は一変し、年明けから第 6 波が瞬間に急拡大しました。1 月 29 日開催の木材学会理事会は、ちょうど第 6 波のピークであり、大会 3 日目のハイブリッド開催の最終決定は 2 月末まで様子を見て判断することとなりました。2 月末の時点でも感染は収束しておらず、まん延防止措置も延長される事態となっていました。受賞式、公開シンポジウム等は完全オンラインに変更する等の代替案も浮上しました。しかし、学会の主要行事ある大会開催においてウィズコロナに向けて何らかの取り組みの跡を残したいという思いと、岐阜会場の準備を半年かけてやってきたスタッフの皆さんの労苦に報いるためにも、会場となった岐阜メディアコスモスが利用できる状況であったこともあり、万全な感染対策を施したうえで開催させていただくことと致しました。学会執行部には、柔軟な対応をしていただきましたことに深く感謝しております。第 6 波のオミクロン株は感染力が非常に強いことが特徴でしたので、大会 3 日目の岐阜でのイベントでは担当者が感染した場合も想定し、代役も事前に決めておく等の対応策も講じて臨みました。

このように、新型コロナの予測のつかない感染状況により、大会運営サイドは 1 年間翻弄され続けてきたというのが正直なところです。第 72 回大会は結果的には、口頭発表・ポスター発表をオンライン開催と決めて準備したことが功を奏したと言えますが、今後は少

しでも早く通常の大会に近づけていく取り組みが必要だと思っています。

ウィズコロナの大会開催に向けて少し整理したいと思います。ハイブリッド方式は多様な可能性を示しますが、現段階ではリモート参加者と会場参加者の両方を満足させるためには技術的に克服しなければならない問題が幾つもあり、専門業者に委託することとなります。また、対面での複数の口頭発表会場（約 10 会場）において相応の人員配置も必要となりますので、人的にも金銭的にも多くのコストを要します。対面オンリーで準備する場合、急速な感染拡大と重なれば、発表そのものを中止にせざるを得ませんので大きなリスクを伴います。ここが大きな課題です。

ウィズコロナのポスター発表においては、ソーシャルディスタンスを保ち対面で行うためには、広大な会場を用意するか、ポスター件数を絞らざるを得ません。今回、プログラム委員会からの提案を受け、オンラインポスター発表でショートプレゼンテーションを試行致しましたが、発表者の研究にかける思いがかなり伝わったのではないのでしょうか。こうした工夫は、今後のポスター発表の在り方を示すことができたのではないかと考えています。

同じ専門分野の第一線で活躍する研究者が対面で熱意溢れる質疑応答を行うことにより、個人では気が付かない考えに到達し、研究の方向性が修正されたり、格段に進展することもあります。また、発表会場において、即、共同研究が成立したりすることもあると思います。こうしたメリットを考えれば、対面による発表形式は、学術の発展にとって「不要不急」には相当しないと判断されます。また、若い研究者、将来研究者を志す学生にとっても、コミュニケーション能力を養う良い機会と捉えることもできるでしょう。個人的な意見ではありますが、大会の研究発表は、段階的（先ずは口頭発表から）に対面式へ戻していく時期に来ていると思っています。最後に各イベントのご担当の先生からのメッセージを紹介します。

#### **【オンライン発表を振り返って】**（名古屋大学 青木弾）

今大会ではオンライン発表会場を ZOOM ウェビナーから ZOOM ミーティングへと変更しました。この変更で参加者個々人のできることが平等になり、一緒に誰が参加しているのかわかるようになりますが、セキュリティは低下します。このコロナ禍においてオンラインミーティングに慣れた方が多く、大きなトラブルもなく実施できました。皆様のご協力にこの場を借りて御礼申し上げます。

### **【ウッドサイエンスミキサーを振り返って】** (岐阜大学 山内恒生)

コロナ感染症の影響により、来日する留学生や、日本からの留学機会が減り、研究者の海外への意識が希薄になってきたと感じていました。今回のウッドサイエンスミキサーでは、若手研究者に、海外での研究経験を語っていただきました。再び海外での研究に目を向け、研究の芽を芽吹かせていただきたいという思いを込めて、テーマを「今こそ世界に芽を」として開催いたしました。話題提供していただいたのは、それぞれ留学経験のある、宮城一真氏（森林総合研究所）、木村ゆり氏（ウイスコンシン大学）、戸塚真里奈氏（千葉大学）、Arif Delviawan氏（静岡大学・ボゴール農科大学）の4名の若手研究者です。留学先の決定方法、コンタクトの取り方、現地の研究環境など、大変興味深い内容の講演でした。視聴者は約100人と盛会となり、終了後は多方面から良い反響がありました。

### **【公開シンポジウム「地域社会から世界に発信する木質バイオサイエンスの挑戦」を振り返って】** (岐阜大学 鈴木史朗)

NPO 法人才の木との共同主催、東海国立大学機構との共催、林野庁後援の公開シンポジウムを名古屋・岐阜大会3日に岐阜市営の複合施設である「みんなの森 岐阜メディアコスモス みんなのホール」で開催しました。今回は本学会初のハイブリッド開催ということで、前回東京大会におけるZoomウェブセミナーおよびYouTube配信のほかに、ホールでの対面開催を行ないました。

私に課せられた課題は、如何にして公開シンポジウムのハイブリッド開催を成功させるか、という事でした。2021年の11月頃からずっと検討していましたが、使用予定のホールの担当者や、シンポジウムのハイブリッド開催を行ったことのある本学教員に意見を聞いてみた結果、実行委員とアルバイトのみでスムーズにハイブリッド開催を行うには、経験がなければ非常にハードルが高く、専門の業者にライブ配信業務を委託することが良いとの考えに至りました。そこで、実施案を作って実行委員会で議論いただき、業者を選定し、2回のリハーサル、前日の会場設営を行い、出来得る限りの準備を行って、本番に挑みました。

午後13:30より、光永実行委員長の司会のもと、東海国立大学機構・松尾総長のビデオメッセージに続き、林野庁天羽隆長官のライブ配信挨拶を頂きました。天羽長官は、当初岐阜に来られてご挨拶される可能性もありましたが、前日に急遽オンラインライブ配信挨拶をされるということになり、林野庁とZoomを接続して、問題なくご挨拶を頂きました。

引き続き光永実行委員長の司会のもと、東海国立大学機構・糖鎖生命コア研究所・副所長の安藤弘宗氏による「糖鎖科学と木質科学の接点」-多様な分子の力の研究と題し、動物糖鎖と木質バイオマスに含まれる植物糖鎖の違いについて分かりやすく解説頂きました。また同氏が全合成に取り組んできた数々の極めて複雑な糖鎖の紹介と、その合成を達成するためのブレイクスルーについての解説もありました。われわれ植物糖鎖の研究者にとって大変示唆に富んだ講演でした。

次に、ぎふの木ネット協議会・会長、ヤマガタヤ産業・代表取締役社長の吉田芳治氏と同

社取締役・戦略企画室室長の吉田香央里氏による「木のチカラで地方創成 -目指すは日本一面白い材木屋-」と題して講演が行われました。銘木に対するこだわりや、木造住宅の機能性を明らかにする共同研究など、日本の木材市場を活性化するための取り組みについて紹介がありました。

最後に、NPO 法人才の木理事長・高部圭司氏による司会で、京都大学大学院総合生存学館（思修館）特定教授の土井隆雄氏による「宇宙における木材利用を目指して」と題して講演が行われました。人工衛星の躯体への木材利用は、大気圏突入の際に燃焼して消失することから、宇宙ゴミ削減に貢献すること、また、宇宙に近い様々な条件下での樹木の生長についての実験結果の報告がありました。

最後に木材学会を代表して土川覚会長より閉会挨拶があり、参加人数は会場およびオンライン合わせて約 200 名という盛会で、講師の先生方や関係各位への御礼の言葉で締めくくられました。